

# 火野葦平作品論及び作家論の系譜

陳 徳超\*・吉村 誠

Genealogy of Hino Ashihei's Works Theory and Writer Theory

CHEN Dechao\*, YOSHIMURA Makoto

(Received September 27, 2019)

## 1. 序論

火野葦平文学、その中でも取り分け日中戦争に取材したいわゆる戦争文学に対して、戦時中から現在までの間にさまざまな視点からのアプローチがなされてきた。それは、これまで目立たぬながら着実な論議が積み重ねられてきたこと、また、葦平の書いたものが読者の関心をなお強く持たせ続けていることを、物語っているであろう。作家への批評、或いは作品の読み方は時代と共に変わっていく。作家が創作する際に意識するか否かにかかわらずその時代の刻印を作品の中に打たないわけにはいかないのだが、それと同じように、読み手もまた己の生きている時代とその状況に立ち向かう中で作品の意味を見出そうとするからである。だとすると、研究史とは唯一の正しい作品把握に至るための過程であるのではなく、各時代の性格に基づいた固有の解釈の連続体以外にはあり得ない。村上林造が言っているように、「研究史論の試みが、個々の作品解釈の背後にそれを生んだ時代を発見することに他ならないとすれば、まず、その作品と時代に対する自分の解釈にこだわることの中にしか、その道はあり得ない」<sup>1)</sup>。本章では、このような問題意識に基づいて葦平が書いた作品、及び作家自身の論考を時系列的に考察した。本章で用いるのは、葦平文学においてもっとも代表的な作品である「糞尿譚」や「兵隊三部作」などに対する論考、及び池田浩士『火野葦平論 [海外進出文学] 論・第I部』(インパクト出版会、2000年)等葦平を研究するうえで見過ごすことのできない基本的な先行研究である。これにより、時代と共に変化していく葦平作品の読まれ方の様子を素描し、あわせて近代日本の精神史の一端を読み取ることが、本章のモチーフである。

## 2. 日中戦時下における研究

### 2. 1 火野葦平文学に対する批評の出発—「糞尿譚」評

「糞尿譚」は1937年11月18日に同人誌『文学会議』第4号に発表された作品だが、同作は鶴田知也の紹介によって第6回芥川賞の候補となった後、見事受賞を果たし、翌38年に『文藝春秋』3月号に転載される。葦平の文壇デビュー作であると同時に、彼が文壇の諸先輩から批評を受けた最初の作品でもある。

例えば、川端康成は「芥川龍之介賞経緯」において、「(…)大早の雲霓を望むが如くで、その多少の欠陥は二の次とし、先ず喜んで『糞尿譚』を推した」<sup>2)</sup>と述べ、或いは室生犀星は同じ選評で、「『糞尿譚』を読んだが特に未来の文学をひからせるものでもなく、亦、逞しさや旺盛さもない、凡作のちょっと上くらいのところである」<sup>3)</sup>と、「糞尿譚」を否定的に評価している。

両氏の評が代表するように、葦平のこのデビュー作が、最初は芥川賞の選考委員たちの間では決して高い評判を得たわけではない。しかし、「糞尿譚」が公にされた時点で、この30歳初頭の新進作家はすでに出征して戦場にいる。これは「糞尿譚」が芥川賞を受賞したもっとも大きな要因だと思われる。なぜなら、商魂逞しい菊池寛には、次のような評があるのである。

作品も、題は汚らしいが、手法雄健でしかも割合に味が細かく、一脈の哀感を蔵し、整然たる描写と言ひ、立派なものである。しかも、作者が出征中であるなどは、興行価値百パーセントで、近来やや精彩を缺(ママ)いでいた芥川賞の単調を救い得て充分であった。(…)自分は、真の戦争文学乃至戦場文学は、実戦の士でなければ書けないという持論であるが、火野君の如き精力絶倫の新進作家が、中支の戦場を馳駆していることは、会心の事で、我々は火野君から、的確に新しい戦場文学を期待してもいいのではないかと思う。<sup>4)</sup>

\* 山口大学東アジア研究科研究員、九江学院外国語学院教員

ここで注目すべきは、菊池がすでに作者の出征中に気づいているという点である。もちろん、作者が出征して戦地にいることは、作品の優劣とは関係ないが、盧溝橋事件後におけるメディアと当局の「蜜月関係」<sup>5)</sup>をあわせて考えると、それは雑誌社にとっては非常に望ましいことであろう。

このように、「糞尿譚」による芥川賞受賞を端緒としながら、その出征中という条件が起爆剤となる形で、「戦地にいる文学者」としての葦平がメディアの期待の渦中に巻き込まれ、後に一躍「時代の寵児」となる。

## 2. 2 「麦と兵隊」と「土と兵隊」に対する同時代受容

1937年7月7日の盧溝橋事件を契機にルポルタージュ文学が盛んになり、数多くの従軍作家、いわゆる「ペン部隊」が戦場の中国大陸に次々と赴き、「戦争」に対する新たな表象の方法が文壇のトピックともなっていく。このような背景の中、1938年4月末、第6回芥川賞をきっかけに、葦平は中支那派遣軍報道部へ転属する。同年8月、受賞後第一作「麦と兵隊」（『改造』1938年8月）が上梓され、たちまち大評判となる。後に改造社から刊行された単行本だけでも百万部以上の版を重ねたという。今当時の夥しい「麦と兵隊」評に目を通してみると、この作品が多くの人々の共感を得、絶賛を博した理由はおおよそ次のようである。

その一つは、まさに「戦地にいる文学者」でしか描写できない現実感、臨場感といったものである。それを三好達治は「麦と兵隊の感想」（『文藝』1938年9月）で、葦平の文学的資質などを褒め称えた上で、「この文学者火野葦平が同時に忠勇果敢な玉井勝則伍長であること」<sup>6)</sup>に注目し、「新聞記事にも、ラジオ・ニュースにも、映画ニュースにも欠けたものを、そして臨時の我々従軍記者達にも企て及ばなかったものを、ついに見事に我々の手許にまで送り届けてくれた」<sup>7)</sup>と述べている。

もう一つは、今日出海が「戦争と文学（麦と兵隊）」で言っているように、読者は作者の「人間的誠実」等をその紙背に感じ取り、そこに心打たれたということであろう。

これ（「麦と兵隊」、引用者注）は徐州攻略戦の隠れた文献でもあろう。或は皇軍の赫々たる威武と称せられる言葉の裏に潜む精鋭の真実の苦闘記であろう。然し文献的価値と教訓的価値を離れて、この記録は真実と誠実に満ちた文学である。孫圩の戦闘で筆者は生死の間を彷徨しつつお筆を取っている。死をまざまざと凝視しつつ、なお死にたくないと言っている。この状態に曝されて人は誇張することも、嘘を言うことも出来ぬのだ。慄然とするほど厳粛なものに取巻かれ、自らも厳粛になって真実を吐露する。この種の記録の

得難き所以である。<sup>8)</sup>

更に、三好の見解に関連するが、発表直後から戦争文学としての評価も高い。例えば、貴司山治の「戦争と文学者—『麦と兵隊』の意義（下）」における「この二つの戦争小説（「麦と兵隊」と上田広の「鮑慶郷」、引用者注）は、出征中の兵士自身が戦線において創作したものであるという点で、それ以前の従軍作家のすべての戦争文学を葬った。（…）この作品（「麦と兵隊」、引用者注）は未だ素材的でありすぎるがその過剰な素材の中から芸術の感覚によって照らし出されている戦争の姿には『西部戦線異状なし』などとは比べ物にならない鮮鋭な真の世界が露出している」<sup>9)</sup>という評判はその一例である。

以上、非常に大雑把ながら「麦と兵隊」に対する同時代評を検証した。「麦と兵隊」だけではなく、同じような論評はその次に発表された「土と兵隊」（『文藝春秋』1938年11月）にも及んでいる。例えば、森山啓は、「文藝時評（二）『土と兵隊』と純文学」（『国民新聞』1938年10月30日）で、「人が、民族感情の中における『ヒューマニズム』『兵隊の人情』と呼んでいるところのものが、この作品の体験記録性と共に文学上の特色をなしている」<sup>10)</sup>とする。また、「土と兵隊」を「麦と兵隊」と対比しつつ、葦平の創作事情に即して前者のよさを書き手の当事者性に求めているのは、「我流文藝観 十一月の巻—昭和十三年—（1、火野葦平の『土と兵隊』）」の宇野浩二で、次のように評価している。

「糞尿譚」は褒貶相半ばしたけれど、「麦と兵隊」は圧倒的に好評であった。恐らく今度の「土と兵隊」は「麦と兵隊」以上に好評かも知れない。それは、一口にいうと、「麦と兵隊」は中に切迫詰まった場面が十分に書かれてはいるが、筆者の立ち場が軍報道部員であり、「土と兵隊」では、筆者が一人の兵隊となっているので、読む者に戦争其のものの実感が生々しく迫っているからであろう。<sup>11)</sup>

一方、森山や宇野とは別に、板垣直子<sup>12)</sup>は「土と兵隊」の芸術性に言及し、北岡史郎「文壇時評 十一月の創作」（『若草』1938年12月）には、「土と兵隊」などを文学領域にとどまらない社会的意義として意味づけしていく言表が見られる。

欧州大戦の戦争文学には、反戦思想にならざるを得ない「絶望」が人々を支配していたのだが、これらの戦争文学（「土と兵隊」や、上田広の「黄塵」など）にはその「絶望」というものがない、むしろ、漠然とはしていても、しかし、東亜の新しき秩序と平和とを

再建するという一つの大きな理想に心からつながっており、戦争そのものは厭うべきものでも、そこから戦争というものを肯定し、大きなものの創造の土台たらしめようとする不拔の意思が根底に腰を据えている。<sup>13)</sup>

「麦と兵隊」や「土と兵隊」といった葦平の戦争文学に対する同時代の論考は、他にも色々散見されるが<sup>14)</sup>、論者たちの立論の角度が必ずしも同一ではなかったにせよ、いずれにしても戦時下という特殊な時代背景の中で、彼らの多くは冷静な目を持ってこれらの作品に向かうことが困難であり、軍の子飼いの報道班員である葦平の「兵隊もの」に対して、読者のほとんどが絶賛の姿勢を示しているのである。

### 3. 戦後における研究の出発

#### 3. 1 マルクス主義者を中心とする批評—敗戦から1950年代初期まで

しかし、戦時下の絶賛や激賞は、日本の敗戦を境に侮蔑になり罵声と変わる。その辺の作業は、すでに『近代文学6 昭和文学の実質』に収録されている都築久義の「『麦と兵隊』の文学性」<sup>15)</sup>で十分に果たされているとも思われるのだが、私なりのイメージを得るための中間的な学習の結果として、この一節を位置づけておく次第である。

1945年10月、獄中にいた共産主義者たちが喝采を浴びながら世に出てくることに象徴されるように、社会の論調が大きく変化していく。その年の暮れ、「帝国主義戦争に協力せずこれに抵抗した文学者のみ」<sup>16)</sup>を入会の条件とする新日本文学会が、宮本百合子や中野重治ら旧プロレタリア文学者を主体に結成される。翌3月、その東京支部は創立大会で、「文学における戦争責任の追求」<sup>17)</sup>という宣言を可決し、葦平を「侵略賛美のメガホンと化して恥じなかった」<sup>18)</sup>者の一人として糾弾する。

葦平自身も、1959年に出版された選集の第4巻の解説に、「戦後の花形となった共産党の『アカハタ』は文化戦犯第一号に、私の名をかかげ、私の周りは敵ばかりになった」<sup>19)</sup>と綴っている。とにかく、小松伸六が「戦争文学の展望」で言っているように、「八・一五敗戦革命以前の十年代の戦争文学は完全にゼロの文学」<sup>20)</sup>といった論調が敗戦直後に文壇の支配的風潮だったとすれば、葦平を文学作品の内部から論じることなく放逐してしまったのも当然であり、異論の余地はないが、このような文壇の風潮や断罪の仕方にさすがに違和感を覚え、懐疑の念を抱いた平野謙や中野重治などの論評も無視できまい。

1946年春、文芸評論家の平野謙は「ひとつの反措定」（『新生活』1946年4-5月）という文章で左翼

文学者の立場から、「小林多喜二と火野葦平とを表裏一体と眺め得るような成熟した文学的肉眼こそ、混沌たる現在の文学界には必要なのだ」<sup>21)</sup>と唱え、葦平を弁護しようとしている。「文学者の戦争責任というテーマとマルクス主義文学運動の功罪並びにその転向問題とは、ほとんど不可分のもの」<sup>22)</sup>だと信じている平野は、そうすることで、昭和の20年間の文学の特質、つまり、「政治と文学」の関係を回転軸とした文学の特質が明らかにされることを語っている。

また、1952年4月、河出書房の『現代日本小説大系第五十九巻』が、昭和10年代の戦争小説を集めて出版された。その中に収録されているのは丹羽文雄「海戦」（『中央公論』1942年11月）、石川達三「生きている兵隊」（『中央公論』1938年3月、発禁）、火野葦平「麦と兵隊」（『改造』1938年8月）、上田広「黄塵」（『文藝首都』1938年1-9月）、日比野士朗「呉淞クリーク」（『中央公論』1939年2月）の5篇である。中野重治はこれらの作品に対して批判を加えながらも、そこに至った成り行きにある程度の理解を示す解説を書いている。例えば、葦平の「麦と兵隊」と上田広の「黄塵」を論じる時、中野は二作とも「人間らしい心と非人間的な戦争の現実とを何とかして調和させたいという作者の心持ちによってつらぬかれている」<sup>23)</sup>と指摘して上田と葦平とに同情を寄せる。また中野の次のような発言から、共産主義運動へ接近している時期の葦平に対する中野の微妙なシンパシーが読み取れるのは確かであろう。

火野は決して、何かはじめから民族主義を「奉じて」いたというものではない。（…）それ相応に民主的立場に立っていたものであり、その基本調で文学の道にすでに入りつつあったものである。（…）「左翼劇場」が九州へ巡業に行き、土地の右翼暴力団の襲撃を受けた時、火野は挺身して劇団を保護して戦ったのである。<sup>24)</sup>

中野はこの論の総括として、「日本の人情主義」<sup>25)</sup>による自己合理化の虚偽などに言及しているが、戦後の左翼陣営の中では、最も温かい理解を示しているというべきであろう。

ついでに、前述の小林と葦平の表裏一体説、すなわち共に「一個の時代の犠牲」<sup>26)</sup>説に端を発し、敗戦直後にいわゆる「荒・平野のコンビ」（荒正人と平野謙）と中野重治の間に「政治と文学」<sup>27)</sup>論争が白熱的に交わされ、その渦中で文学者の戦争責任論にある種の変質が生じていく。以後、旧ナツ派による戦争責任追及の仕方が問い詰められ、「文学者の自己内心の問題たる戦争責任」<sup>28)</sup>が注目されるようになる。その流れの影響で、

後に出現した島田厚の「一文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」（『文学』1960年8月）や、安田武の「戦争文学の周辺—火野葦平—」（『文学』1962年12月）、更に田中艸太郎の『火野葦平論』（五月書房、1971年9月）などのような優れた実証的研究が、葦平の戦争責任をめぐって全く新しい角度からの照明を投げかけている。

### 3. 2 60年代から70年代前半までの研究—島田、飛鳥井、田中、安田等

1960年代に入ると日本は本格的に高度経済成長期へと突入する。社会は未曾有の繁栄を迎え、それに伴って、新しく出現した大衆社会状況の中でマルクス主義の立場からの研究が展望を見失い、退潮に追い込まれていく。その代りに、戦争期の体験を、文学者がどのように咀嚼して自己の内部の問題としながら戦後を歩んできたか、そしてその戦争期の内部的体験を戦後10年余りの間に如何にして彼らの文学的実践の問題としてきたか、ということが人々の注目の的となる。このような傾向を60年代初頭において早くも示していたのは島田厚である。

島田は葦平が自死する1960年、8・15直後における民主陣営のラジカルな戦争責任追及に潜む問題性を指摘しつつ新たな一歩を踏み出す。彼は、「悲しき兵隊」や「革命前後」といった葦平の戦後の作品を手がかりに、葦平は8・15をどのようにまたいだのか、に焦点を絞って論を展開し、最後に次のような結論に辿り着く。

「革命前後」を読んだ読者は、作者が戦争責任を大いに自己批判しているか見えながら、実は、それは極めて不明確に終わっていることに不審の念を感じたことだろう。（…）八月十五日、自室に鍵をかけ、助広の軍刀で自害を思い迷った火野が、その日以来、共産党に戦犯文化人第一号に指名されながら、深い責任を感じ続けてきたものは、戦争責任ではなくして、敗戦責任だったのだ。<sup>29)</sup>

島田はこのように述べ、更に「もともと火野は、戦争責任について関知しようとしなかったのだ」<sup>30)</sup>と主張するが、後にこの論調に反対するような声が出てくる。例えば、飛鳥井雅道「民族主義と社会主義—火野葦平の場合—」には、「彼は彼なりの自己批判を『革命前後』において行った。火野の精いっぱい努力は、確かにその時完結したのである」<sup>31)</sup>という論評がある。

更に、1971年、田中艸太郎は「革命前後」を論ずる時、戦争体験の思想化の欠如<sup>32)</sup>とする安田武の読み方に反し、「『革命前後』は戦争責任の全肯定と、兵隊にシンボルされる庶民の悲しみの代弁を二本の柱とする自裁

の文学、告白の文学、事実の文学である」<sup>33)</sup>と言っている。要するに、飛鳥井や田中などによって、葦平は自らの戦争責任を誠実に自省したという評価が下されているのである。「革命前後」は、葦平の敗戦前後の体験を、ほぼ忠実に再現してみせたものであり、葦平が「嘘をつくまいと考えて、身体をぶっつけるよう」<sup>34)</sup>記した自伝的作品であるが、自らの心情を素直に吐露すること＝真剣かつ誠実な自己批判なのかは、如上のように議論の焦点となっている所以である。

ところで、この時期におけるもう一つのサンプルとして、先ほども触れた安田武の「戦争文学の周辺—火野葦平論—」がある。金子光晴は、戦場の混乱と兵士たちの苦痛を己の利欲のための絶好の機会とする日本民衆の薄汚れた、いぎたない顔を見続けているが、それとは別に葦平は、死を賭した戦場の苦痛に、何でもないように処している民衆（兵隊）のもう一つの顔だけをしか信じていない。しかしながら、それは決して別々の二つの顔ではなく、「一つの顔の二つの表情に過ぎない」<sup>35)</sup>と主張している安田は、その後次のように述べている。

「兵隊」とは、火野が「頑迷に」信じようとしていた、あの民衆の中の「もう一つの顔」である。「もう一つの表情」である。それは、例えば、軍人勅諭をタテマエとした硬直した「軍人精神」を、タテマエとしては素直に受け取りながら、しかも、単なるタテマエとしてではなく、それぞれの生活実感と経験を通して、それなりに自分のチエとしている兵たちの素朴な英知—その生の営み、生き方自体への共感である。<sup>36)</sup>

庶民のもつ二面ではなく、もっぱら一面のみを見つめている葦平のこの人間的資性、或いは浅見淵の言葉で言えば「庶民的善意」<sup>37)</sup>こそ、彼の文学における「もっとも良質な部分」<sup>38)</sup>であることを指摘した安田のこの論が、これまでに公にされた凡百の葦平論のうちで最も優れたものの一つと思われている。作者の心情に深く分け入って共感的に書かれたものであろうが、全体として見る時、あまりにも葦平＝庶民べったりであり、飛鳥井雅道が疑問を呈しているように、「日本の庶民として現象したプロレタリアートたちが、なぜ帝国主義侵略戦争の中で万々歳を叫んだか」<sup>39)</sup>についての切込みが見られない。

その上に、「糞尿譚」に見る糞尿汲取人と塵芥処理業者たちとの「同質的な内部の敵との抗争」<sup>40)</sup>、というような関係構造は、出征前と帰還後の葦平のいわゆる庶民的な諸作品の多くを貫く基本的な構造をなしている。ただし、このような内部の敵、近い敵との抗争という設定を作品に与えることができなかつた表現領域が、ほかな

らぬ「兵隊もの」なのである<sup>41)</sup>。そういった本質的に重要なものを、安田はついに見落としてしまったのである。

#### 4. 「兵隊三部作」への再検討—70年代後半から80年代後半まで

戦後日本の経済と社会にとって、1970年代は激動の時代であった。社会の様々な面に高度経済成長期の矛盾が現れ、社会情勢にもはっきりした変化がもたらされる。経済的な面では20年近く続いてきた高度経済成長の劇的な終焉であり、社会的な面では環境破壊と公害問題のクローズアップである。更に国民意識の保守化を背景に、80年代に入って中曽根政権は「戦後政治の総決算」<sup>42)</sup>を高唱し、戦後民主主義の空洞化を推し進める。国民の間にはようやく戦後の物質的繁栄に疑問を投げかけようとする動きが広がりつつあり、民主主義の脆弱性や経済至上主義などの問題が、改めてその起源にさかのぼって根本から問われている。

70年代半ば以降における研究傾向、即ち「兵隊三部作」への再検討の動きは、このような時代状況を反映して展開されていくことになるが、その立脚点は当面する現実への批判に裏付けられた近代文明への危機意識と反近代の姿勢だと思われる<sup>43)</sup>。ここでは、文学による戦争協力の事実、及び兵士たちの戦場での殺戮や略奪といった野蛮な行為は再び強調され、具体例として、まず安永武人の評論や吉田熙生の覚書<sup>44)</sup>などが挙げられる。

これより安永の「火野葦平『麦と兵隊』」<sup>45)</sup>を検討するが、戦時中はもちろんのこと、戦後においてもその状況の変化につれて、「兵隊三部作」を肯定的に評価する論者が続々と出てくる。1954年、井伏鱒二は『昭和文学全集46』の解説で、「悠々と人間味の追及が行われている」<sup>46)</sup>と言ひ、1965年、吉田精一は『現代日本文学史』で「麦と兵隊」を「戦争のうちに人間的なものを追究しようとするヒューマンイズムが流れていて、以後続出した戦争文学中の圧巻となっています」<sup>47)</sup>とまで評している。

けれども、安永はこの種の読み方を「作品の部分的な一側面をもって、あたかも全体の本質的な特徴であるかのような印象を与える解説」<sup>48)</sup>として批判し、戦時下に「麦と兵隊」と「土と兵隊」で削除されている、日本軍による中国人捕虜の殺害場面をめぐって、自らの論を次の如く展開する。

(…) そのように日本軍の残虐行為を描いていることをもって、直ちに反戦思想や侵略戦争への批判を表現しようとしたとみるのは早計である。彼の「兵隊三部作」ばかりでなく、戦場に取材したほかの全作品の内容や、彼自身、日本軍部の戦争目的を明確につかん

でいなかった点などから考えると、むしろ、そういう残虐場面の描写は模範的兵隊であり、古武士の人情に富む彼が、彼の中に成立している美化された観念的な「皇軍」—「壮大なる戦争」を戦う天皇の神聖で偉大な軍隊にあるまじき行為として反発し批判したのだとみななければ、作品の一貫性が失われる。<sup>49)</sup>

このように極めて独創的な見解を見せた安永は、続いて二作品から、軍隊の階級秩序を超えた「家族主義的な心情への『陶醉』」<sup>50)</sup>や、中国の民衆に対する「優越的な民族意識」<sup>51)</sup>などのようなものを読み取り、昭和10年代における文学と政治との「共犯関係」、及び文学の不毛性といった問題意識を再度提起している。この姿勢自体は、敗戦直後における旧ナツプを中心とする批判のそれとはあまり変わらないが、作品世界の「現実」を積極的に把握することによって、その有罪性を告発しようとしているところに本質的な違いが見られよう。

同根の評論家には、ほかに前田角蔵と西垣勤もいる。前田はその論の中で、日中戦争期における葦平悲劇のもっとも根本的な原因は、「火野葦平が、作家であること自体の有罪性を自覚することなく、従って権力との無批判、無媒介な共犯、加担を事前に歯止めする論理と倫理を内部に欠いたまま戦中期を生き通してしまっていたところにあった」<sup>52)</sup>と度々指摘している。また、西垣評論の最後に、上述の安永の主張がそのまま繰り返されているようにも見える。

火野の最後の人間的なとりでともいうべき、否定すべき捕虜の虐殺について、曖昧な表現に終始し、最後に、他の軍人はどうであれ、自分は手を下さないし、目を逸らしたから人間的だという所に立ち至り、他方、軍隊内部の、上官への限りない敬愛の表出を含む階級不在とも見える兵士同士の限りない連帯精神の描写と、非戦闘員の中国人との親しい交流とを、描いたとすれば、火野の持っているであろう正義感、日本的人情主義は、破綻し、全面的に戦争協力の文学になったと言わなければならないだろう。<sup>53)</sup>

以上、いくつかの論考を具体的に引きながら、80年代前後における葦平文学の研究動向を検証した。この時期の研究は、先学の成果の上に立ちつつ新たな読み方を模索しており、各々、大切な指摘を含んでいる。しかしながら、全体としてみれば、視野がやや狭く、「兵隊三部作」に限定した批判的な捉え方がそれぞれの論の評価軸を成しているのである。その限界性から脱し、もっと広範囲な作品分析に立場を取ったうえで作家論へつなげていくような仕事は、1990年代以降の課題として残され

ていた。

## 5. 現代の研究動向—90年代以降

前節で見えてきた葦平に対する批判の姿勢は、90年代に入ってもそのまま維持されていくが、それよりもポスト・コロニアリズムの流れを受けてか、90年代以降、葦平への関心が一気に高まり、様々な成果が公表されつつある。数多くの研究を説明するのは筆者の手に余るが、それらを大別してみると、大まかに以下の三点に分けられる。

まず第一に挙げられるのは、近隣諸科学の導入による新たな研究視座の獲得である。具体例としては、ポスト・コロニアル批評の立場からのアプローチを試みた歴史学者の成田龍一や、実証的な歴史研究といった方法論を積極的に利用した神子島健<sup>54)</sup>などの存在であろう。

例えば、「花と兵隊」に描かれている、日本の兵隊と中国人女性との「恋愛物語」に着眼した成田は、「占領者の男性と被占領者の女性という、占領とジェンダーの二重の力関係の下における『恋愛』を描くことが、そのまま植民地の関係を描き出すことであるとは、近年のポスト・コロニアル研究が明らかにしたこと<sup>55)</sup>」だという。このように小説を通して15年戦争を考えるのは文学研究というより、寧ろ歴史研究といった方が妥当であろうが、そのユニークな作品把握は、新しい研究視座の開拓が今後に大きな可能性を持っていることを示している。

第二に、「兵隊三部作」をはじめとする「兵隊もの」に限らず、他のジャンルの作品も研究対象となっている。ここでは、近年葦平研究に取り組んでいる増田周子を取り上げたい。

葦平には、中国古典文学『聊齋志異』を元に改変し、再小説化した作品群があるが、1990年度に至るまで、兵隊作家として世に知られている葦平のこれらの作品は、ほとんど注目されてこなかった。そのことに気づいた増田は、「火野葦平『画壁』考—『聊齋志異』との比較を中心として—<sup>56)</sup>」、「火野葦平『鸚鵡変化』論—『阿英』（『聊齋志異』）との比較研究を通して—<sup>57)</sup>」、「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—<sup>58)</sup>」などのような緻密な比較研究を通じ、葦平文学と中国古典文学との関わり、及び戦争文学作家としてのイメージとは異なる葦平の一側面を解明しようとしている。『聊齋志異』との接点への解明に力点を置いている増田のこれらの論考は一つの新風に違いない。

だが、その一方、増田の論には「火野の戦争作品は、決して戦争を鼓吹するものではなく、戦時下で見えてきた真実の兵隊の姿を作品化したものであり、その兵隊の真の姿が人々に感動を与えた<sup>59)</sup>」というような「危険な解釈」<sup>60)</sup>があることも否定できない。何が「真の姿」

であるかを明らかにしないで、このような解釈を出すのは無責任といわねばならない。そもそも、葦平が描いた兵隊の姿は「真実」であるかどうか疑わしい。吉見義明『草の根のファシズム』によると、日本軍人は「遅くなった」「立派になった」という葦平の文章を読んで、兵隊は皆食料不足で痩せているのではないか、「火野よ汝は何を見ているのか」と、戦場で激昂する兵士が現にいたのである<sup>61)</sup>。

最後に忘れてはならないのは、「兵隊三部作」をめぐる論者たちの対立である。この点について、すでに増田論評を見たが、一方、池田浩士は「麦と兵隊」「土と兵隊」の文体を手掛かりに、これらの作品が銃後の読者を巻き込みつつナショナリズムの醸成に関わっていくメカニズムを明らかにしている<sup>62)</sup>。その「対立項」を更に加えると、例えば「兵隊三部作」に描かれている中国人像をめぐる、玉井史太郎は、報道部にいろいろな制限を加えられても、葦平は身についた正義感を曇らせることなく、一兵隊としての視点を貫いて、戦場における兵隊たちの姿を、敵味方なく温かく見つめている<sup>63)</sup>と述べる。それとは別に、成田は葦平を「帝国の眼差し」<sup>64)</sup>を持っている作家として捉え、特に「他者」を描写する時にそれがはっきりと表れてくると言う。

要するに、戦争協力の文学なのか否か、これらの論考は一つの定論までには至っていない。その溝をどのように埋めていくかは今後の研究にゆだねられている。そのためには、作品をその筋や構成に忠実に即して解明していく姿勢が大切になってくる。言い換えると、作品の内容だけではなく、形式の面も視野に入れ、内容と形式の二面を全体的作品評価の下で統一的に把握することが目指されねばならない<sup>65)</sup>。けれども、それ以前に、そこではまず論者自身の戦争認識のありようと現実へ関わる姿勢が問われるはずである。それを抜きにしては、どのように綿密で精緻な作品解釈も空しいものに終わるほかないだろう。

## 6. 終わりに

昭和10年代初期における葦平への注目は、「糞尿譚」による芥川賞受賞というより、むしろ兵隊作家による芥川賞受賞といったほうが妥当だと思われる。葦平の芥川賞受賞（作家）と戦場にあった玉井伍長（兵隊）との必然的な結合が直接的な契機となって、「麦と兵隊」をはじめとする一連の「兵隊もの」が生まれるわけだが、これらの作品が生み出した同時代的意義について、「臨場感」「人間的誠実」「ヒューマンイズム」「社会的意義」などに見られるように、同時代評の着目点が一様ではなかったにせよ、論者たちのほとんどが賛美の辞を惜しまないところに足並みをそろえている。

ところが、敗戦直後、時代の価値観が一転する。それに伴って、1950年代の研究＝それまでなかった否定的な捉え方が、マルクス主義的世界観を図式として葦平及びその作品に当てはめられる傾向を持つようになる。思えば、時代や状況が変化すれば葦平評価も変わる。換言すれば、葦平の文学はいかに歴史的、社会的存在なのかということが言えよう。そこにあったのは、時代における既成の価値観、歴史観によりかかって作品を読むという傾向であり、それは、言い換えれば、読者自身の認識の歪みや限界への意識が希薄だったということである。その点、1960年代から70年代前期の「戦後責任」をめぐる研究にも、1980年代前後の反近代、反資本主義の立場からのアプローチにも共通している。それらはともすれば一面的な作品把握に傾きがちだったという欠点を含んでいるが、「私」の意識が、「私」にとっての客体を志向する時、常に自らに固有の、何らかの価値判断や情動の「彩り」に即して対象を目指している以上、作品への理解が歪みや限界を伴っているのもまたやむを得ない。しかしそうであればこそ、読者は文学作品を読み、その意味を探ろうとする際、如何にしたら己の生活実感に裏付けられた認識の枠組みを乗り越えることができるか、ということが大切になってくる。

最後に90年代以降の研究動向を踏まえていえば、当面の課題が、「兵隊三部作」をめぐる論者たちの対立の深層を探り、各々の作品を全体的作品評価の下で統一的に把握する可能性を模索するところにあると考えられる。その上で、葦平文学におけるそれらの作品の位置づけを明らかにし、筆者の関心でもある葦平の庶民性の行方の問題等々に新たな視点を加えられる可能性を感じる。これ以上の言及は、研究史論である本稿の範囲を超えるので、個々の作品分析については、それぞれ別稿に譲りたい。

#### 付記

本論文は、2018年度日本近代文学会九州支部春季大会（平成30年5月20日、於鹿児島大学）における口頭発表をもとに加筆訂正したものです。ご教示を賜った先生方に心より感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 村上林造「『土』論の系譜—近代日本精神史の一側面として」『あしかび(33)』、太陽社、1987年12月、1頁。
- 2) 『文藝春秋16(4)』、文藝春秋社、1938年3月、355頁。
- 3) 同上、356頁。
- 4) 同上、319頁。
- 5) 神子島健『戦場へ征く、戦場から還る—火野葦平、石川達三、榊山潤の描いた兵士たち—』（新曜社、2012年8月、133—146頁）参照。
- 6) 三好達治『三好達治全集第六巻』、筑摩書房、1965年10月、65頁。
- 7) 同上、66頁。
- 8) 今日出海「戦争と文学（麦と兵隊）」『新潮(408)』、新潮社、1938年9月、32頁。
- 9) 『読売新聞』、1938年8月3日夕刊、4頁。
- 10) 池内輝雄編『文藝時評大系 昭和篇I（第15巻 昭和13年）』、ゆまに書房、2007年10月、437頁。
- 11) 宇野浩二『文藝三昧』、筑摩書房、1940年6月、194—195頁。なお、「麦と兵隊」は周知のように徐州作戦従軍記である。この作戦に際して葦平はすでに中支那派遣軍報道部に転属し、兵士でありながら直接戦闘には加わっていない。「杭州湾敵前上陸」の実戦記である「土と兵隊」と比べて、どこか傍観的な冷静さを感じさせる所以である。
- 12) 板垣直子は「一九三八年の文学—文学時評—」（『文藝』1938年12月）において、「火野氏の余りにも有名なる徐州大会戦を記録した『麦と兵隊』及び杭州湾敵前上陸を描いた『土と兵隊』は、恐らく多くは現れえまい程の芸術性を具え、非常に優れた戦争文学であることを立証した」（前掲注10書、504—505頁）と言っている。
- 13) 前掲注10書、518頁。
- 14) 詳細は星加輝光「火野葦平『麦と兵隊』に対する同時代批評の考察」（『あしへい(第3号)』、創言社、2001年12月、83—100頁）や、松本和也「火野葦平『土と兵隊』の同時代的意義—日中戦争期における文学（者）の位置」（『立教大学日本文学(第115巻)』、2016年1月、143—156頁）などを参照。
- 15) 都築久義「『麦と兵隊』の文学性」『近代文学6 昭和文学の実質』、有斐閣、1977年10月、203—204頁。
- 16) 岩上順一記「新日本文学会創立大会の報告」『新日本文学』（創刊号）、新日本文学会、1946年3月、62頁。
- 17) 小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」『新日本文学』、新日本文学会、1946年6月、64—65頁。
- 18) 同上、65頁。
- 19) 火野葦平『火野葦平選集第四巻』、創元社、1959年2月、428頁。
- 20) 荒正人編『昭和文学十二講』、改造社、1950年12月、190頁。
- 21) 平野謙その他『昭和文学全集第17巻』、小学館、1989年7月、264頁。
- 22) 同上、263頁。

- 23) 中野重治編『現代日本小説体系59』、河出書房、1952年4月、319頁。
- 24) 同上、321—322頁。
- 25) 同上、323頁。
- 26) 注21に同じ。
- 27) 本多秋五「『政治と文学』論争」『中野重治研究』、筑摩書房、1960年9月、260—268頁。
- 28) 三好行雄・竹盛天雄編『近代文学7 戦後の文学』、有斐閣、1977年7月、35頁。
- 29) 島田厚「一文学者の敗戦のうけとめ方—火野葦平の場合—」『文学28(8)』、岩波書店、1960年8月、822頁。
- 30) 同上。
- 31) 飛鳥井雅道「民族主義と社会主義—火野葦平の場合—」『文学理論の研究』、岩波書店、1967年12月、181頁。
- 32) 安田武『戦争文学論』、勁草書房、1964年8月、202頁。
- 33) 田中艸太郎『火野葦平論』、五月書房、1971年9月、184頁。
- 34) 火野葦平『革命前後』、中央公論社、1960年1月、287頁。
- 35) 前掲注32書、163頁。
- 36) 前掲注32書、177頁。
- 37) 丹羽文雄・火野葦平『日本現代文学全集87』、講談社、1962年4月、462頁。
- 38) 前掲注32書、166頁。
- 39) 前掲注31書、171頁。
- 40) 池田浩士『火野葦平論[海外進出文学]論・第I部』、インパクト出版社、2000年12月、228頁。
- 41) 同上。
- 42) 歴史学研究会編『日本 同時代史5 転換期の世界と日本』、青木書店、1991年1月、134頁。
- 43) 高橋三郎『『戦記もの』を読む—戦争体験と戦後日本社会』（アカデミア出版会、1988年2月、167—168頁）によると、「戦記もの」は戦後社会への暗黙の批判という意味を持っているのである。
- 44) 吉田熙生「戦争文学の思想—石川達三『生きている兵隊』、火野葦平『麦と兵隊』など—」『国文学解釈と教材の研究20(9)』、学灯社、1975年7月、156—161頁。
- 45) 安永武人『戦時下の作家と作品』、未来社、1983年12月、7—36頁。
- 46) 丹羽文雄・火野葦平『昭和文学全集46』、角川書店、1954年10月、395頁。
- 47) 吉田精一『現代日本文学史』、筑摩書房、1965年10月、155頁。
- 48) 前掲注45書、9頁。
- 49) 前掲注45書、17頁。
- 50) 前掲注45書、21頁。
- 51) 前掲注45書、25頁。
- 52) 前田角蔵「日中戦争期の火野葦平（下）—兵隊三部作を中心として—」『日本文学32(3)』、日本文学協会、1983年3月、23頁。
- 53) 西垣勤「日中十五年戦争下の文学への一視点」『日本文学38(10)』、日本文学協会、1989年10月、12頁。
- 54) 前掲注5書。
- 55) 川村湊その他『戦争はどのように語られてきたか』、朝日新聞社、1999年8月、138頁。
- 56) 増田周子「火野葦平『画壁』考—『聊齋志異』との比較を中心として—」『国文学(95)』、関西大学国文学会、2011年2月、45—60頁。
- 57) 増田周子「火野葦平『鸚鵡変化』論—『阿英』（『聊齋志異』）との比較研究を通して—」『関西大学文学論集60(4)』、関西大学文学会、2011年3月、45—61頁。
- 58) 増田周子「火野葦平『糞尿譚』論—その典拠『聊齋志異』『画皮』との比較—」『国文学(96)』、関西大学国文学会、2012年3月、273—294頁。
- 59) 増田周子「火野葦平『取りかえばや物語』論—その典拠と改変—」『東アジア文化交渉研究(5)』、関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS、2012年2月、210頁。
- 60) 注48に同じ。
- 61) 吉見義明『草の根のファシズム』、東京大学出版会、1987年7月、65頁。
- 62) 池田浩士は前掲注40書において、「『麦と兵隊』の日記体と、『土と兵隊』の書簡体は、いずれも、作者が戦地の現実を真実味を込めて伝えるのに適した表現形式であるばかりでなく、銃後の答えを思い描きながら、或いは先取りしながら、銃後との会話を重ねるための、極めて効果的なスタイルでもある。この表現形式を通して、火野葦平は、兵隊作家である自分に読者が期待するものを、銃後に送り届けたのだった」（548頁）と指摘している。
- 63) 玉井史太郎『河伯洞余滴』、学習研究社、2000年5月、26頁。
- 64) 前掲注55書、129頁。
- 65) 内容と形式の二面についての詳述は、拙稿「火野葦平『麦と兵隊』論—戦争文学への一視点」（『東アジア研究(16)』、山口大学大学院東アジア研究科、2018年3月、144頁）参照。